

ミネ・オオクボとニューヨーク ——日系二世女性画家の「アフター・キャンプ」——

金田由紀子

要旨：本稿では、日系二世画家のミネ・オオクボ（Miné Okubo 1912–2001）が戦時中の日系人強制収容所を出て、ニューヨークで画家生活をするようになった経緯をたどる。ミネ・オオクボにとって、芸術都市ニューヨークでの新生活は彼女の過去を購うに足るものであったか、戦後のオオクボの美術作品の評価をどうなすべきか等、強制収容所を出たあとのオオクボの人生と作品を検証する研究の出発点として覚書きを著す。「アフター・キャンプ」という用語は、戦後 20 世紀半ばの日系アメリカ人の経験を著したグレッグ・ロビンソンによる著書のタイトルに由来する¹⁾。

序：

日米開戦の翌年 1942 年、西海岸の日系アメリカ人のほとんどが全米 10 ヶ所に及ぶ日系人強制収容所に送られた。その数は 11 万人以上である。日系人は少しずつ収容所を出て一般社会に戻ったが、最後に収容所（WRA Incarceration Camps）が閉鎖されたのは、1946 年 3 月 20 日であった²⁾。強制収容にいたるまでの日系人への差別的法制度や戦時中の強制収容体験に加えて、強制収容所を出た経緯や、日系人たちが戦後のアメリカ社会でどのような待遇を受けたかも重要な研究テーマである。ミネ・オオクボの場合は、自分の収容所体験の表現が彼女のキャリア形成に深く関わった、まずは、オオクボの生涯の歩みを、*Densho*（「日系アメリカ人歴史ポータル」）からの

1) Greg Robinson, *After Camp: Portraits in Midcentury Japanese American Life and Politics* (Berkeley: University of California Press, 2012), p. 1. Robinson の *After Camp* に対して、例えば歴史家の Brian M. Hayashi は、同じ研究テーマを扱った先行研究を十分に取り入っていない等の批判をしている (*Reviews in American History*; Baltimore. Volume 41, Number 3, Sep 2013, Johns Hopkins University Press, pp. 519–524)。しかし、Robinson 著の本書は、ニューヨークの環境・及びミネ・オオクボの評価に関して参照すべき点を多々含んでいると筆者は判断する。

2) “About the Incarceration,” *Densho* (2020 年 2 月 6 日参照) (encyclopedia.densho.org/history/)

意識で紹介したい。次に、彼女が世に出るきっかけとなった『市民 13660 号』の一部を紹介し、最後にオオクボが強制収容所を出て新しい人生を始めた東海岸のニューヨーク市の環境を述べる。

目次:

1. ミネ・オオクボの生涯と仕事
2. 『市民 13660 号』
3. 「アフター・キャンプ」: 日系人再定住をめぐるニューヨークの環境
4. ミネ・オオクボとニューヨーク

1. ミネ・オオクボの生涯と仕事³⁾

ミネ・オオクボは、『市民 13660 号』(*Citizen 13660*, 1946) の作家として有名である。タンフォランとトパーズの日系人強制収容所での彼女の体験を素描(線画)と文(Image and Text)で表現した作品である。しかし、オオクボ自身は、自分を「線画家というよりは」まず第一に画家(油彩画家)であるとみなしていて、自分のアートをみがくことに 70 年間で捧げた芸術家であった。

生年からキャリア形成まで

オオクボは、1912 年 6 月 27 日、タメツグ・オオクボとミヨ・(カトウ・)オオクボの 7 人の子供の一人として、カリフォルニア州リヴァーサイドで生まれた。家族の言い伝えによれば、母親のミヨは東京芸術大学の優等卒業生で、1904 年セントルイス万国博覧会の折、日本の美術・工芸展に参加させるため、日本政府が選りアメリカ合衆国に送った書道家であった。母は家庭でよく絵を描き、7 人の子供たちに芸術の道を歩むように勧めていたと、ミネ・オオクボは後年になり回想している。母は、ミネが子供の頃、正確な模写ができないという理由で度々怒ったそうである。1940 年に母ミヨが亡くなった後、ミネは片手に聖書を持った母を描いた《ミヨと猫》という絵を捧げている。長男ベンジ(ブンジ)・オオクボも母の影響を受け、二世画家の草分けとなり、ロサンゼルス

3) “Mine Okubo” authored by Greg Robinson, *Densho* (encyclopedia.densho.org/Mine%20Okubo/). 2020 年 1 月 18 日参照。金田由紀子意訳

アート・スチューデント・リーグ (the Art Students League) 学長になっている。長女ヨシコ・(タナカ・)オオクボもアーティスト及び画廊マネージャーであった。おそらく、ミネのキャリア展開において最も強い影響を及ぼした人物であろう。

ミネは、リヴァーサイドのポリー高等学校を卒業し、リヴァーサイド短期大学 (現在のリヴァーサイド・コミュニティ・カレッジ RCC) に入学した。1933 年頃、カリフォルニア大学パークレイ校から奨学金を得て同校に入学し、美術 (Fine Arts) で学士号と修士号を取得した。卒業後、ニューディール期公共事業促進局 (Works Progress Administration) の連邦美術プロジェクト (the Federal Art Project) から職を得て、壁画創作の助手を務めている。1938 年、オオクボは、バーサ・ヘニック・トーシグ奨学金 (Bertha Henicke Taussig fellowship) を獲得し、18 ヶ月間、欧州で美術を学んだ。

1939 年 9 月、ヨーロッパで戦争が勃発し、オオクボはアメリカ行き最後の船の一艘に乗り帰国した。ベイ・エリアに戻ると、サンフランシスコ美術協会 (the San Francisco Art Association) での活動を始め、サンフランシスコ美術館 (現在の SF-MOMA) で年一回催される絵画・水彩画展覧会に出品し続けた。1940 年にはカリフォルニア大学美術展で第一位を授与され、同年夏、オオクボは、ゴールデン・ゲート国際博覧会 (the Golden Gate Exhibition) においてメキシコの有名な画家ディエゴ・リヴェラ (Diego Rivera 1886–1957) が描く壁画制作の助手として選ばれた。

戦時強制収容所経験とその後

1942 年春、オオクボがオークランドの軍人接待ハウス (Servicemen's Hospitality House) で壁画制作中に、大統領令 9066 号が交布された。オオクボは、門限時間後も外出できる特別の許可を得て、自由に移動し壁画を完成させた。オオクボの家族は、全員、西海岸からの立退きを強要され離散した。オオクボの父は逮捕され、モンタナ州のミズーラで拘束された。兄のベンジ・オオクボは、ハートマウンテンに勾留されたが、ベンジはそこで美術学校を開いた。他の兄

弟姉妹は、ポストン強制収容所に送られた。

ミネと兄弟の一人は、タンフォラン集合所⁴⁾で拘束され、その後ユタ州トパーズ日系人強制収容所⁵⁾に移動させられた。トパーズでは、オオクボは美術クラスを教え、文学創作を含む雑誌『トレック』(*Trek*)の創設に協力し、その表紙絵と挿絵を担当した。収容者たちはカメラ持ちこみを許可されていなかったの
で、オオクボは、強制収容所体験をスケッチ(“drawings”)で記録しようと決意した。彼女は、1000枚以上のスケッチを描き、その一部を正式な素描と絵画に仕上げた。1943年早々、収容所の衛兵を描いた彼女の素描がサンフランシスコ美術館の展覧会で賞を獲得し、その複製が『サンフランシスコ・クロニクル』誌(*San Francisco Chronicle*)に掲載される。オオクボの作品に感動した『クロニクル』の編集局は、同誌の日曜版『現世界』(*This World*)の特集として掲載するため、一連の強制収容所スケッチをオオクボに依頼した。強制収容所それぞれの場面に対するオオクボのコメント付き素描が1943年半ばになり『クロニクル』に登場した。それが世間の注目を集め、『フォーチュン』誌(*Fortune*)の編集者を惹きつけた。

オオクボは、他の二人の日系画家(ヤスオ・クニヨシとタロウ・ヤシマ)と一緒に、日本特集号発行のため『フォーチュン』誌に雇われた。『フォーチュン』誌に載ったオオクボの強制収容所の素描選には、日系アメリカ人に関する記事も付され評判を呼んだ。『フォーチュン』誌の賞賛を受け、1944年8月、サンフランシスコ美術館はオオクボによる原画の特別展覧会を開催した。同展覧会では、クニヨシとヤシマの作品も一緒に展示された。

『フォーチュン』誌の支援もあり、1944年、オオクボはトパーズ日系人強制収容所を出て、ニューヨークに定住することができた。同誌の編集局がオオクボのために、家賃統制されたアパートをグリニッチ・ヴィレッジに見つけ、オオクボは逝去の数ヶ月前までこのアパートで暮らし仕事をした。ニューヨー

4) Tanforan Assembly Center (April 28, 1942–October 13, 1942) (*Densho*) (2020年2月10日参照)

5) Topaz Concentration Camp (September 11, 1942–October 31, 1945) (*Densho*) (2020年2月10日参照)

クに到着するなり、オオクボは、リベラルで移民寄りの季刊誌『コモン・グラウンド』(Common Ground)の創設者・編集担当であるM. マーガレット・アンダーソン(M. Margaret Anderson)と会った。アンダーソンに勧められ、オオクボは強制収容所の素描画と他の作品を集め、1945年3月に『コモン・グラウンド』事務所で展覧会を開催した。次にはニュー・スクール(the New School for Social Research)で同展覧会となり、続いて西海岸での巡回展が行なわれた。シアトル美術館(the Seattle Art Museum)で同展覧会が催された時、『タイム』(Time)誌はオオクボについての記事を掲載した。

この間、オオクボは彼女のスケッチを連作物語になるよう配列し、それぞれのスケッチに添ったテキスト草稿を書いた。1946年9月、コロンビア大学は、このイメージ&テキスト連作を『市民13660号』(Citizen 13660)という題名の著書として出版した。『市民13660号』は、オオクボの強制転居体験とタンフォランとトパーズにおける彼女の生活を詳しく描いたものである。そのイメージ&テキストは、強制収容所生活の多岐にわたる特徴を表わしたものである。砂埃のあらし、プライバシーの欠如、収容者用住居がほとんど改修していない馬小屋だったこと、学校問題、忠誠テストなどが描かれている。密告疑惑がある収容者を叩きのめす過激なギャング収容者集団さえ登場する。

オオクボは、『市民13660号』が出版される前から芸術の道を歩み、グループ展にも何度か出品し、カリフォルニアの夏季コースで美術を教えていた。しかし、まだ油彩画で暮らしを立てることが出来なかったため、戦前と同じように壁画制作プロジェクトに参加していた。特筆すべきは、1948年にアメリカン・エクスポート・ライン(American Export Line)に招聘され、新しい4艘の船「4つのエース」のサロンを飾る8点の壁画に描いた絵画である。オオクボは商業美術家・挿絵画家としても活躍し、彼女の挿絵はいろいろな雑誌に登場し、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』誌や『ニューヨーク・タイムズ』誌でオオクボ特集を組んだこともあった。

戦後の作品と再発見

オオクボは結局、生活と芸術表現のため、本の挿絵の仕事をした。1948年、キリスト教会国立評議会 (the National Council of Churches) (当時はキリスト教会連邦評議会) 出版部のフレンドシップ社から依頼を受け、アジアの光景を描き、トロ・マツモトの伝記小説『7つの星』(*The Seven Stars*) への挿絵とした。フレンドシップ社は、その後数年間にわたり、日本や国際関係に関する6冊の本に付ける挿絵をオオクボに依頼した。その間、オオクボは、社会学の書、ロバート・オブラインアン著『大学の二世』(*College Nisei*) (1950年出版) の口絵を描いた。また、1959年にはスプリングー社の依頼で、解剖学のテキスト『解剖学と生理学の臨床における連携』(*Clinical Coordination of Anatomy and Physiology*) に挿絵を描き新しい境地を開いた。この仕事のために解剖学の細部を注意深く研究し覚えた、とオオクボは後に語っている。また、同出版社が出した心理学の書、ウォルター・トマ著『家族の布置』(*Family Constellation*) にも挿絵を描いている。1960年以降、収入減にはなったが、書籍挿絵の仕事を減らし、油彩画創作を再開し優先的な仕事とした。(オオクボは画廊や商業的な販売方法を好まなかったのも、主に特定のパトロンを持ち仕事をした。)

この頃までには、オオクボの日系人強制収容所体験とその表現(アート)は目立たなくなっていた。しかし、1965年、CBSテレビのドキュメンタリーに『二世の誇りと屈辱』(*Nisei: The Pride and the Shame*) でインタビューを受け特別出演した。1970年代には、戦争時に描かれたオオクボの作品がリドレス(権利回復)運動 (the Japanese American redress movement) に参加していたアジア系アメリカ人の芸術家や学者たちに改めて注目されるようになった。初めての大規模回顧展『ミネ・オオクボ: あるアメリカ人の体験』展 (*Miné Okubo: An American Experience*) が、1972年オークランド美術館で初公開され、そのカタログは広い範囲に出まわった。

1974年、リヴァーサイド・コミュニティ・カレッジ(RCC)は、女子同窓生年次代表としてオオクボを招聘し、同時に、大学のアート・ギャラリーでオオクボ作品展を開催した。それに続く年月も、オオクボは、強制収容されていた

人たちによる芸術展に招待され出品し、また彼女の素描画は『アメラジア・ジャーナル』やアジア系コミュニティが発行している新聞に載った。特に際立ったのは、十二支に基づいた素描画を『ニューヨーク日米』誌 (*New York Nichibei*) とサンフランシスコの『北米毎日』誌 (*Hokubei Mainichi*) の新年号に毎年掲載したことである。1983 年、『市民 13660 号』はオオクボ自身による「序文」付きの新しい版として復刻し、アメリカ図書賞 (American Book Award) を授与された。オオクボは、戦時転住局 (War Relocation Authority) による強制収容所芸術集である『内部からの眺め』 (*The View From Within*) と『言葉を越えて』 (*Beyond Words*) にも彼女をインタビューした内容が掲載され、アジア系アメリカ人フェミニストの著『禁じられた針目』 (*The Forbidden Stitch*)、ベティ・ラデューク製作の 1996 年ドキュメンタリー・フィルム『不屈の女性芸術家たち』 (*The Persistent Women Artists*) にも登場する。1987 年、カリフォルニア州教育局 (the California Department of Education) は、カリフォルニア州史における 12 人の女性先駆者の一人として、オオクボを選任した。

『市民 13660 号』復刻版が日系アメリカ史の古典本の地位に達し、オオクボ自身は日系アメリカ人リドレス運動に益々積極的に参加するようになっていった。1981 年、戦時期における市民強制転住・強制収容に関する合衆国委員会 (the US Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians) ができて、オオクボは自分の体験を証言し、『市民 13660 号』の一冊を証拠として提出した。オオクボは、同様に NCJAR (National Council for Japanese American Redress) の集団訴訟「ホーリ対アメリカ合衆国裁判」 (*Hohri v. United States*) に参加し、アメリカ合衆国連邦裁判所の公聴会にも出席した。

オオクボは亡くなる数ヶ月前まで現役の画家として仕事をしていたが、逝去時まで約 2000 点を自宅仕事場と複数の倉庫に収集していた。彼女の没後、オオクボについての議論が活発になり、相次いで本も出た。例えば、2004 年のエレナ・タジマ・クリーフとグレッグ・ロビンソン編『アメラジア・ジャーナル』 (*Amerasia Journal*) は、オオクボに捧げる特別号を出した。続いて 2008 年には、オオクボの経歴・仕事を論じた評論集 *Miné Okubo: Following Her Own*

Road が出版された。メアリ・カートンとテレサ・ラーキン作の一人芝居『ミネ・オオクボ：彼女自身の名前』（*Miné: A Name for Herself*）は2006年初演であった。最も充実した遺産は、リヴァーサイド・コミュニティ・カレッジに創られた。オオクボ関係の文書や多数のオオクボ・アート・コレクションがある。2006年2月、リヴァーサイド・コミュニティ・カレッジのキャンパスに、彼女の偉業を称えるため、「オオクボ大通り」と正式に改名した通り（“Mine Okubo Avenue”）が出来た。オオクボボ・コレクション（the Okubo Collection）は、大学の社会正義・自由権センター（Center for Social Justice and Civil Liberties）が所蔵する永久コレクションになり、オオクボ生誕100年の2012年6月に当コレクションが公開された。

2. 『市民13660号』

ミネ・オオクボのキャリアを詳細に見ていくと、強制収容所に送られる前の壁画制作（ディエゴ・リヴェラの助手として参加）、アジア・太平洋戦争中に『フォーチューン』誌から（ヤスオ・クニヨシとタロウ・ヤシマと共に）依頼された日本特集の絵、力を込めて描いたと思われる解剖学の挿絵、複数の日系新聞新年号に掲載された十二支の素描、そして何よりも1960年以降オオクボが最も力を注いだ多数の油絵など、彼女の画業は多岐にわたり、検証したい作品が多い。しかし、『市民13660号』は、結果的にオオクボを有名にした出世作となり、今でも一般にも広く知れ渡った作品である。本稿では、簡単に本書の一部を紹介し、本書に関する筆者の見解の一端を述べる。

ミネ・オオクボが自分自身の強制収容体験を線画と文章で描いた『市民13660号』（*Citizen 13660*）は⁶⁾、1946年にコロンビア大学が初めて出版し、1983年にはワシントン大学出版局が再版を出した。終戦直後出版の『市民13660号』は、強制収容所を個人の言説で公表した初めての出版物であった⁷⁾。アジア・太平

6) 筆者が参照したのは、Miné Okubo, *Citizen 13660* (Seattle: Washington University Press, 1983) である。

7) “Mine Okubo Collection,” Japanese American National Museum (jamn.org/collections/mine-okubo-collection). なお同サイトには、*Citizen 13660* の基礎となった197点のイメージ

洋戦争の記憶が生々しく残る終戦直後の1946年はまだ出版には早すぎ、日系人強制収容所の記憶（歴史的事実）を受け入れるのは難しかったという説もある⁸⁾。1983年の出版は、日系アメリカ人の権利回復運動（リドレス）が高まっている時で、前述のように、1981年にはオオクボ自身も自らの収容所体験を国会が主催したCWRICで証言し、『市民13660号』を証拠として提出している⁹⁾。

オオクボは、「私たちが忘れられていない事を知らせるために、心をこめて手紙や小包を送ってくる強制収容所の外にいる大勢の友人たちに収容所生活を伝えたいので」スケッチを始めたとも言っている¹⁰⁾。

197作品からなるイメージ&テキストの『市民13660号』は、公費留学でパリに滞在しスイスを旅行中だった1939年9月3日、イギリスとフランスが宣戦布告、オオクボは無一文のままフランスから締め出されるところから始まる。スイスの農場で働き一時をしのいだあと、3ヶ月かかりパスポートを獲得し、ボルドーから出る最後の船にやっと乗り込み、ニューヨークに到着。カリフォルニアの我が家に戻るとすぐに母の死に遭遇する。

日系人強制収容所体験を伝える記録や創作は多数存在するが、オオクボの『市民』は、初めての個人レベルの体験公開という希少性があるのみならず、約200ページの本書は、ノン・フィクションであるにもかかわらず、一気に読ませる迫力と物語的な時系列の流れ・語りがある。生き生きとした筆致の線画は非常にリアルで、臨場感にあふれる視覚効果がある。

タンフォラン仮収容所とトパーズの強制収容所での生活を伝える一人称の語りで、オオクボ自身の肖像が必ず各イメージに登場する特徴は、タロウ・ヤシマの『新しい太陽』（*The New Sun*, 1943）の手法を想起させる、という説もある¹¹⁾。また、それぞれのイメージにオオクボの自画像を描きこみ、自身の〈視線〉を刻んでいるのは、オオクボのジェンダーとも深い関係があろう。移民一世であっ

が掲載されている（2020年2月9日参照）。

8) “Introduction” by Christine Hong, *Citizen 13660*, p. ix.

9) *Ibid.*, p. x.

10) “Preface to the 1983 Edition” by Miné Okubo, *Citizen 13660*, p. xxvi.

11) Robinson, *After Camp*, p. 79.

たオオクボの母は、有名な書道家であったにもかかわらず、家族の世話のため自分の芸術をあきらめた。母の死後、ミネ・オオクボは、自分は決して結婚はしない・自分は家族のために家事に明け暮れる人生は歩まない・芸術の道だけに行く、と決意する¹²⁾。〈自己〉の存在を、強制収容所の中でも常に確認していたからこそ、『市民 13660 号』は自画像が必ず登場するイメージの集合体になったのだとも考えられる。

それぞれのイメージに登場するオオクボ自身の肖像は、表情豊かであり、彼女の内面と視点をよく表わしている。また『市民 13660 号』には、強制収容所での苦難に満ちた生活場面の数々とともに、庭を造り学校教育に力を入れるなど、日系人が積極的に収容所生活を改善していったポジティブな努力も描かれている。後に古典となり、本書が日系以外の人々にも強くアピールしたのは、オオクボが描いた日系人の強さ・明るさ故だったのではなかろうか。

3. 「アフター・キャンプ」：日系人再定住をめぐるニューヨークの環境

ミネ・オオクボは、1944 年に強制収容所を出た後、ニューヨーク市マンハッタン区のグリニッチ・ヴィレッジのアパートに移り住む。*Densho* が伝えるように、このアパートで、オオクボはほぼ全生涯にわたり生活し、創作活動続けた。ドイツとイタリアがアメリカ合衆国に宣戦布告した日（1941 年 12 月 11 日）を描いたイメージのテキストに、「白人の友人たちが東部に行ったほうがよいと提案していた」と記している¹³⁾。オオクボ自身も長い間東部に行きたいと願っていたが、当初は頼れる知人もいなかった¹⁴⁾。オオクボには家族の世話もあり、西海岸に留まったまま、強制収容所への道を歩まざるをえなかった¹⁵⁾。『フォー

12) Miné Okubo and Fay Chiang, “Riverside,” *Miné Okubo: Following Her Own Road*, ed. by Greg Robinson & Elena Tajima Creff (Seattle: University of Washington Press, 2008), pp. 36–37.

13) Miné Okubo, *Citizen 13660*, p. 10. ただし、オオクボのテキストには、「12 月 11 日、アメリカ合衆国がドイツとイタリアに宣戦宣告した」と逆のことが書かれている。

14) Deborah Gesensway and Mindy Roseman, *Beyond Words: Images from America's Concentration Camps* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), p. 66.

15) Okubo, *Citizen*, p. 6.

チュン』誌からの仕事提供に伴いニューヨークでの居住が始まり、オオクボの夢がかなったのである。

過去から現代にいたるまで、全米においても、ニューヨーク市に限っても、日系人口比率は非常に低い。アメリカ合衆国国勢調査局 (US census bureau) によれば、2010 年の全米人口は約 3 億 870 万人 (308,745,538 人)、それに対して同年の日系人口は約 760 万人である (正確には、①=日本だけの背景を持つ人が 763,325 人、②=①+日本と他のアジア系の背景を 1 つか 2 つ以上持つ人が 841,824 人、③=①+②+日本とアジア系以外の人種的背景を 1 つか 2 つ以上持つ人が 1,304,286 人)。同じく、同国国勢調査局によれば、2010 年のニューヨーク市全人口は約 810 万人 (正確には 8,175,133 人)、日系人口は約 2 万 4000 人である (正確には、全米と同様の分類方法で、① 24,277 人、② 25,450 人、③ 31,742 人)。この数字は、調査に応じなかった日系人の数は含まないので、実際にニューヨークに滞在・居住している日系人の数字とは言えないが、公的調査では、ニューヨーク市の日系人口は、ニューヨーク市全人口の 1 パーセントにも満たない¹⁶⁾。

『ニューヨーク百科事典』(ケネス・T・ジャクソン編著)によれば、ニューヨーク市に日本人が住み始めたのは 1876 年商社マンたち 6 名であった。その後の日系人口は、1900 年に約 1,000 人、1909 年には約 3,000 人、それから約 100 年後、2000 年の日系人口は、26,419 人と記されている¹⁷⁾。1790 年以来、アメリカ最大の都市であり、現代では 800 万人都市と言われるニューヨーク市における日系人口比率は、ニューヨーク全史をふり返っても、きわめて低い。

シアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、各都市におけるジャパン・タウン盛衰の歴史に象徴されるように、西海岸大都市では日系コミュニティはエスニック集団として、可視的な共同体として存在し続けている。それに対して、ニューヨークの日系社会は、その始まりから現在にいたるまで、エスニック集団としてのまとまりを象徴する共同体の場 (居住区域やジャパン・タウン) を持

16) U. S. Census Bureau, 2010 Census (2020 年 2 月 5 日参照)。

17) Kenneth T. Jackson ed., *The Encyclopedia of New York City*. Second Edition (New Haven: Yale University University, 2010), pp. 670–71.

つことがなかった¹⁸⁾。本格的なニューヨーク史を出版し始めた歴史学者ダニエル・H・イノウエも、ニューヨークの日系人は、少数民族集団として群落的なまとまりを形成しなかったと述べている¹⁹⁾。確かに、1905年創設の「日本クラブ」(The Nippon Club)、1907年創設の「ジャパン・ソサエティー」(Japan Society)、1911年創設の「ニューヨーク日系人会」(Japanese American Association of New York)等の施設における日系文化啓蒙活動等は盛んであるが、ニューヨークの日系人が広いエリアで長期にわたる生活空間を共有することがなかったのは事実である。

ニューヨークには〈可視的に〉まとまった日系社会が存在していなかったにも関わらず、ミネ・オオクボの強制収容所退去後の定住先として彼女を積極的に受け入れる背景があった。ひとつは、ニューヨーク日系社会の伝統的な人間構成と産業である。日米開戦当時、農業を主たる産業として発展してきた西海岸の日系社会に対して、東海岸(特にニューヨーク)ではビジネスマン・芸術家・研究者や学生も日系社会の重要な構成員であった。西海岸と東海岸は、それぞれ異質な発展をとげていた。

ニューヨークは様々な民族的背景を背負った移民の流入が都市史をつくってきた国際都市であり、学問と芸術の都市でもある。特にニューヨークの日系に關しては、「戦前の数十年間にわたり、日系の知識人、芸術家、パーフォーマーたちが集まる中心として有名」であった²⁰⁾。野口英世、高峰譲吉、サダキチ・ハートマン、ヤスオ・クニヨシ、伊藤道郎、石垣栄太郎、保忠蔵、野田英夫など、ニューヨークで活躍していた日系人(一世と二世)は多数いた²¹⁾。

また、アジア・太平洋戦争の最中でさえ、ニューヨークは「大統領命令9066号」(西海岸の日系人を強制収容所に送ることになった指令)から正式な影響を

18) 日本食店などが並ぶ、マンハッタンの中8丁目・東9丁目周辺一部や東53丁目を(擬似的な)ジャパン・タウンと考える人々もいるが、面積的にも小さなエリアであり生活感のない地域である。

19) Daniel H. Inouye, *Distand Islands: The Japanese American Community in New York City, 1876-1930s* (Louisville: University Press of Colorado, 2018), p. 6.

20) Robinson, *After Camp*, p. 54.

21) *Ibid.*, p. 54.

受けない地域であった²²⁾。1941年12月9日に戦争が勃発すると、数百人の日系人（日本の外交官、商人、地域社会のリーダー等）がエリス島に拘束され、その一部は後に釈放されたという事実はある²³⁾。しかし、ニューヨークは、西海岸とは違い、当時〈軍事的必要性〉のある地域とはみなされなかったため、ルーズヴェルト大統領が発した9066号が全日系人に及ぶことはなかった。西海岸で日系人が普通に生活できなくなった戦時中は、ニューヨークは合衆国本土で最多人口の「自由」日系社会となった。グレック・ロビンソンによれば、1942年半ばには2000人程であった日系人口は、1943年から1944年の間、少なくとも1000人の再定住者が増加し、1946年から1947年には日系人口は約6000人にもなっていた²⁴⁾。

日系人のニューヨーク再定住支援で、近年特に注目されるようになってきたのは、日系の政治的グループ、「日系アメリカ人民主義会議」（the Japanese American Committee for Democracy）（JACD）の存在である。JACDは、ニューヨークの日系社会のリーダーたちがエリス島に拘束されたあと、日系社会の中で指導的役割を果たした「反ファシストの左派集団」である²⁵⁾。

JACDの前身は、日系一世と二世からなる「東部日系住民への民主的待遇を求める会議」（the Committee for Democratic Treatment for Japanese Residents in Eastern States）であり、最初のリーダーは、ニューヨークの日系アメリカ人メソジスト教会牧師アルフレッド・アカマツである。日系社会でアメリカ志向と民主主義志向を啓蒙するのが目的であった。当初は作家のパール・S・バックを含む白人のリベラルな人々が役員を務めていたが、日米開戦を機に、日系人のトマス・コムロをリーダーに日系人主導の団体として再結成された²⁶⁾。1942年2月19日に発令された「大統領命令 9066号」の結果、日系人たちが西海岸を強制撤去となった時、JACDは合衆国の「戦争努力支援」と「日系人の市民権支

22) Robinson, *After Camp*, p. 56.

23) *Ibid.*, p. 55.

24) *Ibid.*, p. 56.

25) *Ibid.*, p. 55.

26) *Ibid.*, p. 184.

持」の間で葛藤を抱えたと言われている²⁷⁾。しかし、日系人が強制収容された後、政府の方針が日系人の再定住と決まった後は特に、日系人が一般社会に戻り再定住をする推進力として政府と日系人収容者との橋渡しとなった²⁸⁾。1943年夏には実績が現れたが、強制収容所を出た知識人や芸術家の中には、ニューヨークに呼ばれ仕事に起用される者たちがいた。その中の多数は、JACDの加入者及びJACDの集会に出席する人々であった。または、JACDの美術審議会であり国吉康雄の指導下にあった美術会議 (the Arts Council) に惹かれていた者たちが含まれていた²⁹⁾。JACDは、戦後、強制収容所経験者たちがニューヨークから立ち去り、また、マッカーシズムの嵐が吹き荒れる時代が来て、1950年代後半には衰退してしまった³⁰⁾。JACDは日系人全般を支援しニューヨークの支援環境を強化したが、ミネ・オオクボの『市民13660号』に対しては、表現・効果が弱いとして当時は厳しい評価を与えたのは³¹⁾、先見の明がなかったと言えよう。

4. ミネ・オオクボとニューヨーク

20世紀後半のニューヨークは、世界の現代美術をリードする都市のひとつであった。1940年代から1950年代の抽象表現主義、1960年代から盛んになるポップアート等を華やかに世界に発信していた。オオクボは、ワシントン広場に近いグリニッチ・ヴィレッジの中心で居住と創作をしていたが、近くには (University Place)、ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock 1912–1956) をはじめとする抽象表現主義の画家たちが談論を繰り広げたシーダ・バー (Cedar Tavern) もあった。しかし、欧州系アメリカ人男性たちが主流を構成していたこのグループとオオクボとの間に、特に強い関係はなかったと思われる。オオクボは、商業主義に走りがちな画廊との関係を好まず、特定のパトロンにだけ作品を提供する

27) Robinson, *After Camp*, p. 185.

28) *Ibid.*, p. 188.

29) *Ibid.*, p. 188.

30) *Ibid.*, p. 191.

31) *Ibid.*, p. 82, p. 265.

という道を選んでいた³²⁾。彼女はニューヨークの流行とは無関係に見える穏やかな暖かさを放つ絵も沢山描いている。『市民 13660 号』の画家として有名なオオクボであるが、『市民 13660 号』のさらなる研究とともに、その後のオオクボ作品の研究をもっと進めてよいであろう。特に、ニューヨーク美術界の流行に巻きこまれないで創作活動を続けたオオクボが、アーティストとして、ニューヨークの芸術環境とどのように関わりながら生きていたかを、今後の研究テーマのひとつとしたい。

謝辞

本稿は 2018 年度経済研究所「海外出張助成金」による研究成果の発表である。本研究所にはここに記して謝意を表したい。

32) オオクボ作品のコレクターは、例えば、Dr. Roy W. Leeper である (*Miné Okubo: Following Her Own Road*, pp. 52–64 参照)。